第七回　平成二十六（二〇一四）年十一月十五日

西宮周辺の和歌・発句を読む

盛田　帝子（もりた・ていこ）

はじめに

みなさま、こんにちは。盛田帝子と申します。今回は「西宮周辺の和歌・発句を読む」というテーマで、みなさまになじみの深い西宮市の名所を詠んだ和歌や発句を鑑賞しながら、古来この地域が日本文化の中でどのように位置づけられ享受されてきたのかを考えてみたいと思います。

西宮は景色がよく、古くより歴史や文化に彩られた土地として和歌に繰り返し詠まれ、人々に親しまれてきた名勝の地です。たとえば、藤原俊成が判をして、建安二（一一七二）年に道因によって広田神社に奉納された『広田社歌合』には、

海上眺望　　藤原頼実

はるばると御前（おまえ）のをきを見わたせば雲居（くもゐ）にまがふ海人（あま）の釣舟（つりぶね）

という有名な和歌があります。現在の西宮浜から、海の彼方を見渡した歌です。はるばると沖を見渡すと、はるか向こうの空の青さと海の青さがまじりあう遠い水平線の辺りに、魚を獲る漁師たちの釣舟がまぎれこんでゆくように見えるという「御前のをき（沖）」の雄大な景色を描いた歌です。

この歌が、広田社歌合で「海上眺望」という題で詠まれたことを考えると、「御前のをき」は、広田神社の前面に位置する神域の海と解釈して詠まれたと考えられ、下の句の表現は、神域の海だからこその雄大な表現と考えられるでしょう。

判者の俊成はこの表現に注目して「文字つづきうるはしくくだりて、雲居にまがふ海人の釣舟といへる末の句もいとよろしき歌とこそきこえ侍れ」と絶賛しています。神域の海ならではの雄大な風景の中で魚を捕る漁師たちが描かれている一首で、この歌も西宮の名所を詠んだ古歌として有名なものですが、実際にこの地を訪れた事がない人々は、西宮浜から見る海の眺望を、和歌に描かれたイメージで享受してきたことでしょう。歌ことばが作る土地のイメージは、交通が発達した現代と比較すると、比べものにならないくらいの影響力をもっていたと思われます。

時代が下って江戸時代になりますと、西宮浜は、桜鯛漁で有名な場所だったようです。十八世紀に刊行された『摂津名所図会』の挿絵をみますと、桜鯛を一本釣りにする漁師たちが描かれており、画面の右上に「西宮御前澳の桜鯛は、蛭子三郎殿つり初給ひしより世に賞す。これ我国の名産にして中華に鯛ある事いまだ聞ず、惣じて諸魚ともに網にて漁したるは次にして、釣りにかゝりたる魚は至って美味なりと人の語りき」と、著者の秋里籬島によって、西宮御前澳で一本釣りにする桜鯛は大変美味しいとの解説

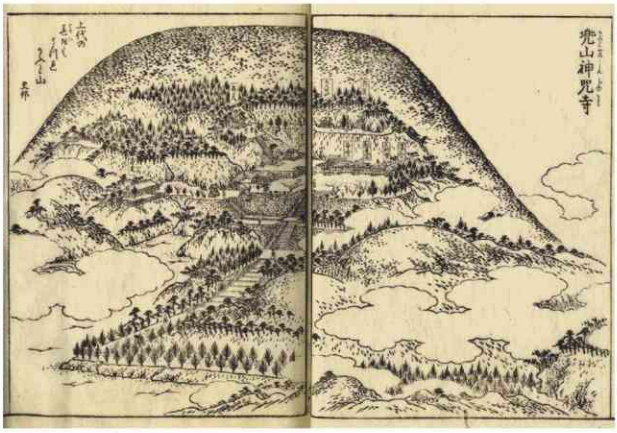
が施されています。

春泉が描いた挿絵に注目してみましょう（図1）。前景いっぱいに大きな一艘の釣り船が描かれ、手前に小舟が描かれています。それぞれ、鯛を一本釣りする漁師たちの活気ある様子が細やかに描かれています。視点を遠くに転じると、沖の彼方には帆掛け舟の帆が沢山描かれています。頼実などの古歌で描かれてきた、空と神域の海のあわいに海人の釣り船がまぎれこんでゆく様子が、帆掛け船の帆を海の彼方に沢山描くことによって表現されているのでしょう。古来、神域として人々に理解され、神様のご加護を受けている西宮浜の活気が、次々と桜鯛を釣る漁師たちの躍動を通して活写されています。

西宮市には古来、西宮浜以外にも西宮神社や廣田神社、甲山（図2）、西宮の傀儡師（図3）、武庫川のおかしの宮、鳴尾の西瓜など、名所や名産についての多く伝承がつたえられていますが、このような土地の名所や名産が、地元の人々のみでなく、全国的に広く知られるようになったきっかけに、江戸時代に出版された名所図会類の存在があると思われます。

大阪市立図書館デジタルアーカイブより（http://image.oml.city.osaka.lg.jp/archive/）

（図1）御前澳
秋里籬島/著・竹原春朝斎/図画『摂津名所図会 武庫郡・菟原郡』 1796年刊より



（図2）兜山
秋里籬島/著・竹原春朝斎/ 図画『摂津名所図会　武庫郡・菟原郡』
1796年刊より
大阪市立図書館デジタルアーカイブより（http://image.oml.city.osaka.lg.jp/archive/）

（図3）西宮の傀儡師
秋里籬島/著・竹原春朝斎/ 図画『摂津名所図会　武庫郡・菟原郡』
1796年刊より
大阪市立図書館デジタルアーカイブより（http://image.oml.city.osaka.lg.jp/archive/）

名所を活写した旅行ガイドブック『摂津名所図会』

江戸時代になると各地で産業が発達し、人々の生活水準も上がってゆきます。人々は武力の代わりに藩校や寺子屋などに通って読み書き能力を身に付け、実生活で役立つ教養を学び、文化を担う底力が庶民層にまで浸透しました。交通網が整備されたおかげで人々の間で旅行が流行し、全国各地の名所をたずねた人々によって沢山の紀行文が生み出されました。江戸時代の生活水準の向上と人々の間に浸透した教養は、やがて出版文化の隆盛をもたらします。文字の読み書きができる人々が、写本と違って比較的安価に、容易に手に入れることのできる浮世絵や名所図会類を購入し、日本全国の名所を、錦絵や和歌・和文・発句・挿絵などによって知ることができるようになりました。旅行ガイドブック名所図会類の流行です。寛政～天保期にかけて約七十種類の名所図会類が刊行されたといいますから、まさに旅にあこがれていた江戸時代の人々にとっては格好の出版物だったといえるでしょう。

さて、名所図会類が流行した今から二百二十年ほど前の江戸時代中期、西宮の名所は、どのように描かれ紹介されていたのでしょうか。西宮をまだ訪れたことのない江戸時代の人々は、西宮をどのような場所として理解していたのでしょうか。その手がかりを与えてくれるのが、さきほど「御前澳」の挿絵で掲げた、江戸時代に出版された旅行ガイドブック、秋里籬島著『摂津名所図会』（寛政八（一七九六）年～十（一七九八）年刊）です。

大田南畝も参考にした『摂津名所図会』

『摂津名所図会』が、摂津国を訪れる人々の旅行ガイドブックとして使用されていたことは、大田南畝（おおたなんぽ）の在坂日記『蘆（あし）の若葉』からもうかがわれます。南畝は、戯作者・狂歌作者として有名な江戸の文人で、雅文芸にも俗文芸にも通じていた江戸文壇の大御所。松平定信の寛政の改革を機に戯作者としての活動をやめ、官吏としての生活に主軸をおくことになります。享和元（一八〇一）年、五十三歳の時には、江戸幕府の支配勘定役として勤めていましたが、その年の正月十一日に、大坂銅座詰を拝命し、二十七日に大坂に向けて江戸を出立することになります。大坂に赴任すると、仕事の間を縫うように、天王寺の古刹、高津、生玉神社、天満天神など、さまざまな名所を見物しています。

（図4）『摂津名所図会 武庫郡・菟原郡』表紙
秋里籬島/著1796年刊
大阪市立図書館デジタルアーカイブより
（http://image.oml.city.osaka.lg.jp/archive/）

（図5）大田南畝肖像画
『近世名家肖像』東京国立博物館蔵より
（http://webarchives.tnm.jp/）

次に挙げるのは、三月廿五日の『蘆の若葉』の記事の一部です。この日は「朝雨　昼晴　夕陰晴不定」とあり、朝は雨が降っていたのですが、その雨が晴れて昼に太陽が顔を出してから、南畝は、野田の藤を見ようと大坂の町に散策に出かけています。過書町、梶木町、船町橋を渡って玉水町、筑前橋・田蓑橋を渡って梅田橋を渡り、上の天神の開帳を見て裏門から出、上福島の中天神を遥拝してから野田の白藤を見て、茶屋に寄り、上福島に向かい妙徳寺を訪ねています。

妙徳寺、黄檗宗なり。堂のうちに五百羅漢　あり。客殿に万福殿といへる額あり。
乙巳年孟秋吉日黄檗隠元老人書とあり、聯あり。名所図会にくはし。
久安寺鉄梅、庭に梅の木あり。小き寺なり。それより麦畑をつたひて左のかたにゆく。
小流の橋をわたりて了徳院にいたる。池に杜若さかりなり。紫の藤棚あり。
白き藤もあり。白きはふさみじかく、花大なり。めづらしき藤也。
浦江村・大仁村のかたにゆく道ありしをゆかずして、たゞちにゆけば、
梅田の墓所にいたれり。火葬の場なり。
名所図会に、浦江村、杜若の名所とあり。（岩波書店『大田南畝全集』第八巻）

妙徳寺は、黄檗宗の寺で堂のうちに五百羅漢を安置しており、客殿に「万福寺」と揮毫した隠元の額があり、聯もあったと南畝は記しています。そして『摂津名所図会』に、この妙徳寺のことが詳しく掲載されているのだといいます。その後、隣接する久安寺の梅の木を見て、麦畑を伝って進み、橋を渡って了徳院に到着。池には、杜若が今を盛りと咲き誇っており、紫の藤棚がある。房は短いけれども花の大きな珍しい白藤もあると見聞しています。その後、浦江村・大仁村に行く道があったが、そちらへは行かず、まっすぐにゆくと梅田の墓所に着いた。火葬場のある墓所であるといい、行かなかった浦江村は、『摂津名所図会』によれば、杜若の名所であるといいます。

大坂に赴任してからの南畝は、多忙な公務を縫うようにして、毎日のように大坂の名所をたずね歩き回っています。『蘆の若葉』の記述によれば、ここに挙げた『摂津名所図会』や『摂陽群談』『難波鑑』などの地誌・旅行ガイドブックを参考にしながら計画を立て、大坂の名所を訪ね歩き、時には、これらのガイドブックを携帯していたこともあったようです。『摂津名所図会』は、江戸の南畝にとって不慣れな摂津国を探訪するときの心強いガイドブックであったことが知られます。南畝は『蘆の若葉』という日記に、たまたま『摂津名所図会』を参考にしながら大坂の町を歩きまわったことを書き残していますが、当時の人々も『摂津名所図会』をこのように活用していたのでしょう。

『摂津名所図会』に描かれた西宮の鳴尾

江戸時代の人々が活用していた『摂津名所図会』に、現在、西宮市として知られている地域の名所はどのように描かれていたのでしょうか。そのひとつの例として「武庫郡の鳴尾」を取り上げ、そこに描かれた挿絵や和歌、発句などを鑑賞してみましょう。

『摂津名所図会』武庫郡の目次（図6）を開くと、鳴尾に関する名所や名産として、鳴尾里（なるおのさと）、鳴尾一松（なるおのひとつまつ）、名産鳴尾西瓜（めいさんなるおすいくは）、鳴尾泊（なるおのとまり）などが出てきます。江戸時代中期には、鳴尾が一松や西瓜などで有名な地域として把握されていたことが知られます。

本文を見てみましょう（図7）。鳴尾里に関しては、

鳴尾里（なるおのさと）　小松の西、鳴尾（なるお）村をいふなるべし。又成尾とも書す。属邑八村（やむら）あり。

新拾遺　常よりも秋になる尾の松風は分て身にしむ物にぞ有ける　西行法師

夫木　やゝ寒きなるおの里の秋風に波かけ衣うたぬ日はなし　為家

武庫郡

武庫山 一名六甲山 護摩堂 九想の滝 乾滝 鳴滝 大師堂 大牛滝

楠李葉嶽

世二所観音堂 麦田神影向石

敷地林寺

鹽尾寺

見佐の神祠

平林寺

穴塚

大家

武庫川 鎮守弁財天 弁天社向石

名沢丘

極尾湯

薦家

武庫川宮

渡部細古居

廣田神社

大嶋神祠

武庫海

武庫浜

琴浦神祠

鳴尾里

甲山神呪寺 山頂社 荒神石

名次神社

小林神祠

奥之池

二人家

住吉家

寶集院

牟古入江

小松嵩

鳴尾一松

伊和志豆神社

山伏塚

天童塚

武庫塔

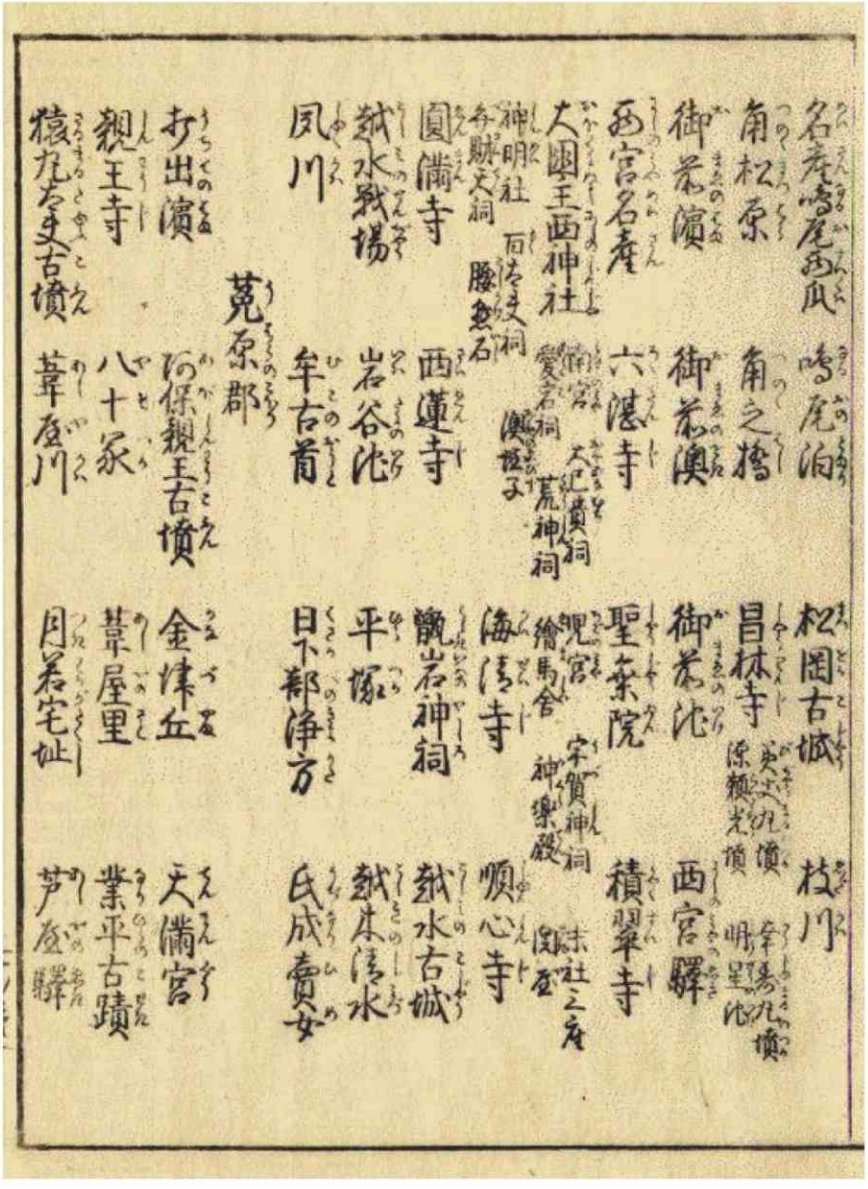
押照宮

瓦林古城

武庫浦

等覚寺

大阪市立図書館デジタルアーカイブより（http://image.oml.city.osaka.lg.jp/archive/）



(図6)『摂津名所図会　武庫郡・菟原郡』目次
秋里籬島/著・竹原春朝斎/ 図画　1796年刊

小松嶽　小松村の境辺にあり　支考集に遠白嶽

支考

あふひのさとり風をと陣屋をも小松の衛にみる時哉　勝明法師

日

子の日して小松の陣をとるふる世の雪をとるふる世の雪をとる　佐成

押照宮　小松村の内街道の南にあり　武内宿禰の祠　故押照宮の祠と

いへり其證不詳　押照の祠故の地なり　土人へ伝へ押照

宮と称し　山北の生土神　祭は志ふ　武式内の

岡田神社と書し　北へ岡田神社へ　村ふのり

御供家　押照洞　二町許西ふのり　御供新の古跡

土人小松市蔵家といへる人あり　繁昌

等覚寺　小松村ふのり　作土宗大悲山観音院と号し寺号へ

十一面観音の古仏へ押照宮へ山号の供寺

時尾里　小松の西隣尾村と　又成尾とも書し　隔邑八村の

勅撰

常ならぬ秋ふる尾の松風ふて身にしむ物ふを有る　西鶴法師

支考

尾ふたれ野ふの里は秋風ふ波うけ来ふ有るふし　お市

時尾一ツ松　今ふ尾ふ

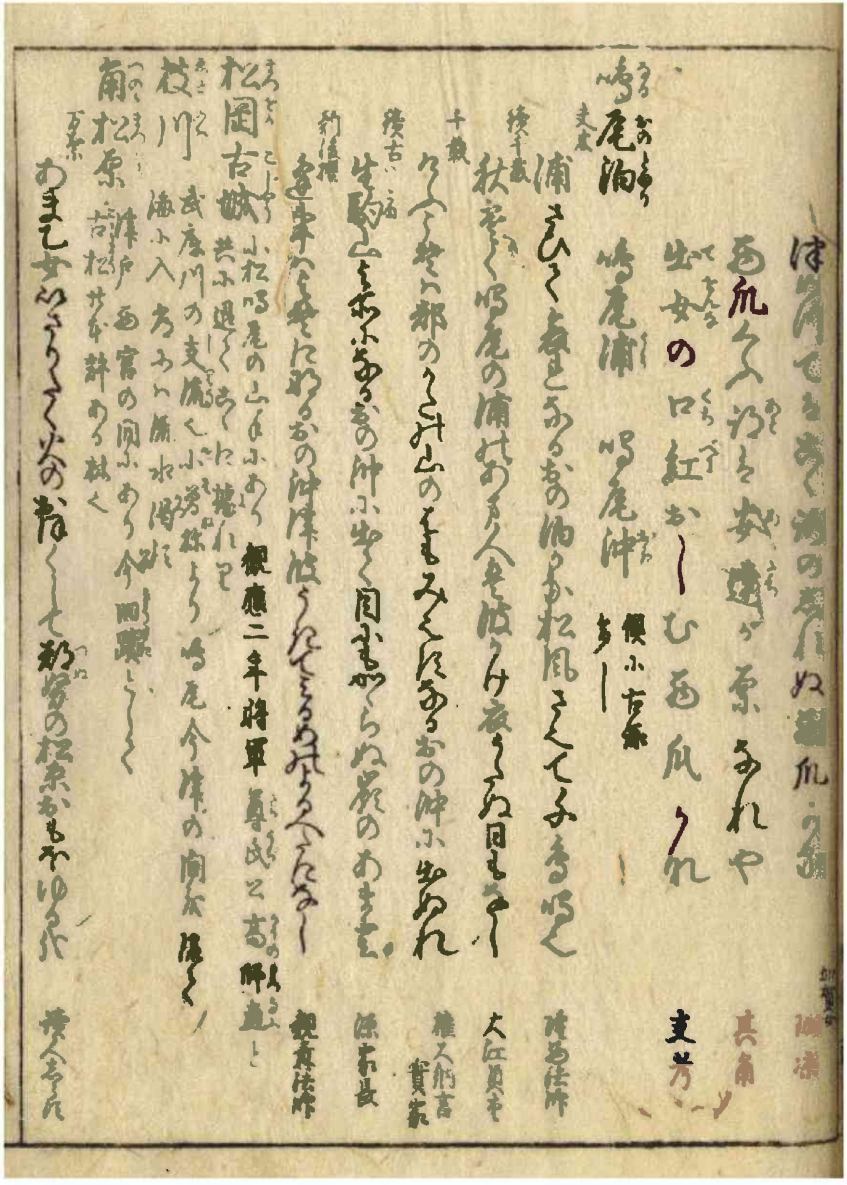
拾玉　古有ふ徳に

あ身あを時尾ふたる一ツ松くもの上ふ見えひとし　美濃

名産時尾西瓜　時尾村ふ多く出る

上京

大阪市立図書館デジタルアーカイブより（http://image.oml.city.osaka.lg.jp/archive/）



(図7)『摂津名所図会』本文
秋里籬島/著・竹原春朝斎/ 図画　1796年刊

と記述されています。鳴尾は、現在の西宮市の武庫川河口西岸付近をいい、古来、摂津国の歌枕として有名な場所でしたので、京の都に住む歌人たちにとっても、比較的よく知られた馴染みある場所であったようです。『摂津名所図会』の著者の秋里籬島も京都の人で、安永～文政年間（一七七二―一八三〇）に、名所案内書や読本や俳諧入門書などを出版して活躍した人ですが、歌枕として有名な鳴尾里に関しては、実際に訪れたことはなく、当時の文献でこの部分の解説を書いたのかもしれません。小松村の西側にある鳴尾村のことを「鳴尾里」というのであろうと推定し、「鳴尾」を「成尾」とも表記することがあるのだと記しています。

引用しているのは西行法師と為家の和歌です。西行法師の和歌は、『新拾遺和歌集』秋歌上（『新編国歌大観』）には以下のようにあります。

秋のはじめなるをといふ所にてよめる　西行法師

三一四　つねよりも秋になるをの松風はわきて身にしむ物にぞ有りける

詞書に、秋の初めに、鳴尾という所で詠んだ、とあります。西行は、鳴尾の浦の松風を聴きながら、松風がいつもよりもとりわけて身にしみて哀れに感じられる、といいます。西行の感じる鳴尾の浦の松風の哀れさとは、どこからくるものなのでしょうか。籬島は「鳴尾里」に続けて、鳴尾の一つ松について、以下のように記述します。

鳴尾一ツ松　今さだかならず。古歌に詠ず。

拾玉　我身こそ鳴尾にたてる一ツ松よくもあしくも又たぐひなし　慈鎮

籬島は、『拾玉和歌集』に入集している慈鎮の歌を引用して、十八世紀の今では、本当かどうか確かめようがないが、慈鎮（一一五五～一二二五年）の頃には、鳴尾の浦には、「一ツ松」という松が一本だけ立っていたようだと推測しています。

「一ツ松」については、中世以降に編集された『歌枕名寄』の中にも登場します。『歌枕名寄』は、日本国内の歌枕を三六巻に部類し、歌枕ごとに例歌を挙げた名所歌集なのですが、その中に「鳴尾」を詠んだものとして、以下の歌が掲載されています。

無友松　　俊頼朝臣

四四一〇　なるをなる友なき松のつれづれとひとりもくれにたちにけるかな

一株松　雪　中務卿親王

四四一一　さらでだにさびしくみえし一もとのなるをの松に雪ふりにけり

西行

四四一二　つねよりも秋になるをの松風はわきて身にしむ物にぞ有りける

（『新編国歌大観』による）

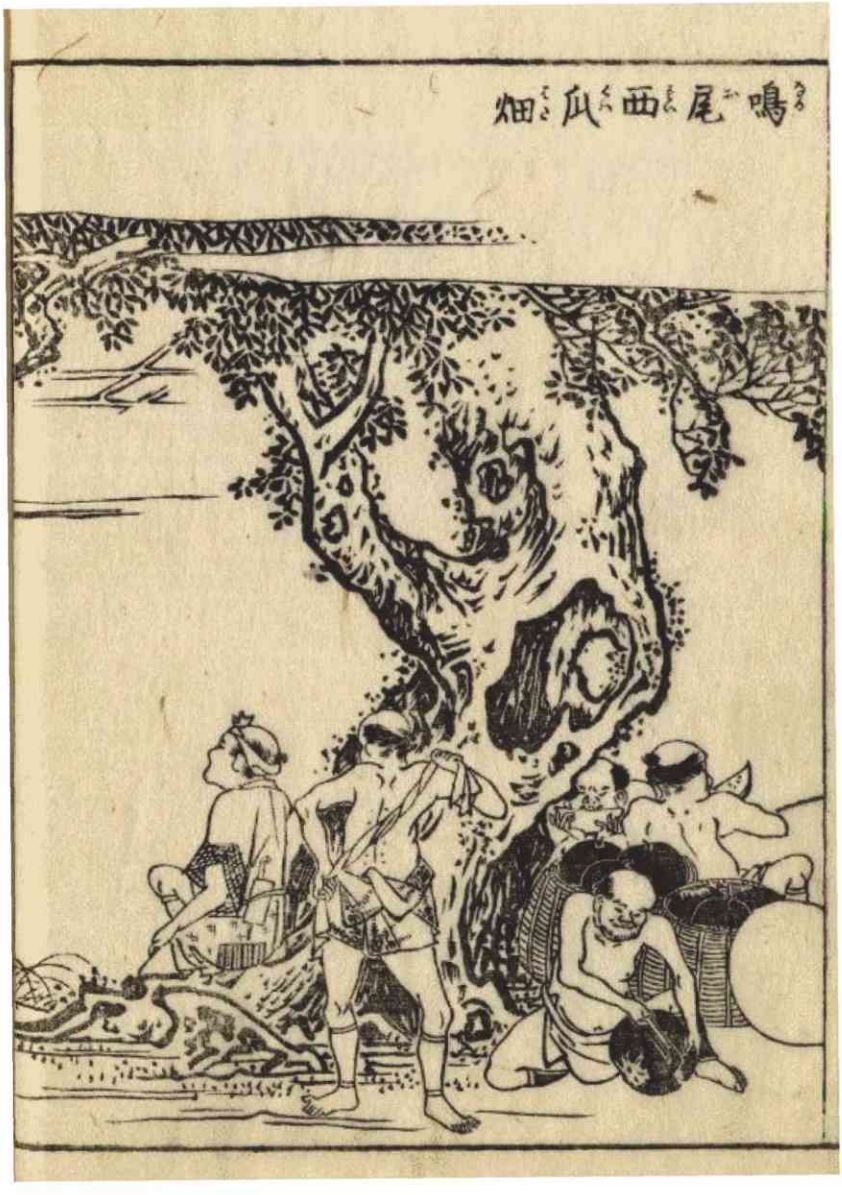
慈鎮が「一ツ松」と表現した鳴尾の松は、俊頼朝臣には「無友松」という題で、友のいないたったひとりで立つ松として表現され、中務卿親王には「一株松」という題で、一つだけ離れて立っている寂しく見える松の木として表現されています。歌枕として表現されてきた鳴尾の浦の松は、たった一本だけで立っている孤高の松だったようです。

鳴尾の浦の孤高の松を「一ツ松」として表現した慈鎮と同時代を生きた西行ですが、その西行が感じた鳴尾の浦の松風の哀れさも、たった一本だけ孤高に立っている松風を聴いての感慨だったのかもしれません。西行が自分の生涯と鳴尾の一本松を重ね合わせた時、とりわけて、その松風の孤高の響きが身にしみて感じられたのではないでしょうか。西行の歌の「秋になるをの松風」は、季節が秋に「なる」という意味と「鳴尾」の「なる」がかけられています。『新拾遺和歌集』に入集している西行法師の和歌は『歌枕名寄』にも「鳴尾」を詠んだものとして掲載されており、歌枕「鳴尾」が西行法師の歌などをお手本として後代の歌人たちに繰り返し詠まれ、「鳴尾」が、西行の歌のわびしい松風のイメージで定着していたことが推測されます。籬島が西行のこの歌を「鳴尾里」の歌として引用したのも、「鳴尾里」が、古来、一本松で有名な伝統のある場所であるということを、世の中に広く伝えたいと思ったからでしょう。

寂しげな一本松のある鳴尾の浦の景気が歌枕としての鳴尾のメージでしたが、江戸時代の鳴尾は、西瓜の産地でもあったようです。

名産鳴尾西瓜（めいさんなるおすいか）

『摂津名所図会』の初版本に石田幽汀の描いた鳴尾西瓜畑（なるおすいかはた）が掲載されています（図8）。暑い夏の最中に鳴尾のスイカ畑での作業を終えた後の農夫たちが、大きな木の陰に、大きなかご二つにいっぱいに収穫したスイカを入れて、ひとときの涼をとったり、汗を拭いたり、収穫したスイカを包丁で力を入れて切ったり、スイカにかぶりついたりしている様子が生き生きと活写されています。画面の左上には、籬島の詠んだ発句が掲載されています。



大阪市立図書館デジタルアーカイブより（http://image.oml.city.osaka.lg.jp/archive/）

（図8）鳴尾西瓜畑
秋里籬島/著・竹原春朝斎/ 図画『摂津名所図会　武庫郡・菟原郡』1796年刊

ひいやりと腹も鳴尾の西瓜かな　籬島

夏の暑いさなかの冷えたスイカは何よりのご馳走です。水分を多く含んだひんやりと甘い鳴尾のスイカを想像するだけで、お腹が減って鳴ってしまうという感慨が詠み込まれています。

先ほど掲げました本文を見ますと、「名産鳴尾西瓜」として以下のようにあります。

名産鳴尾西瓜　鳴尾村より多く出る。上品とす。

つめつてはこゝろのしれぬ西瓜かな　加賀女　珈涼

西瓜くふ跡は安達が原なれや　其角

出女の口紅おしむ西瓜かな　支考

籬島の解説によれば、鳴尾村は、品質のよい高級スイカが沢山とれる場所だったようです。鳴尾産のスイカとして特定されたスイカではありませんが、江戸時代に詠まれたスイカの発句を三句、籬島は挙げています。三句の中でも「西瓜くふ跡は安達が原なれや」という其角の句はユニークなものです。

「安達が原」は現在の福島県二本松市、安達太良山南東麓の二本松安達ケ原にあたるとされている歌枕で、『大和物語』五十八段に、平兼盛が土地に伝わる黒塚伝説（黒塚に鬼がこもっている）を踏まえて詠んだ歌が出てきます。

おなじ兼盛、陸奥の国にて、閑院の三のみこの御むすこにありける人、黒塚といふところに住みけり。そのむすめどもにおこせたりける。

みちのくの安達が原の黒塚に鬼こもれりと聞くはまことか

といひたりけり。　（小学館　新編古典文学全集『大和物語』より）

清和天皇皇子貞元親王の第三子の息子である源重之が、陸奥国の黒塚に住んでいます。重之には娘たちがおり、兼盛は、奥深く住んでいる娘たちを、黒塚伝説の鬼になぞらえてたわむれに「陸奥の安達が原の黒塚に鬼が籠っているとききますが、それは本当ですか」と和歌できき、娘をもらいたいと願う冒頭部分です。この歌がきっかけとなって、「安達（あだち）が原」は歌枕として広く知られるようになってゆきます。

その後、中世には謡曲「安達原」（「黒塚」）で安達原の鬼女伝説が広まってゆきます。「安達原」は黒塚伝説を踏まえた以下のようなお話になります。廻国行脚する山伏、東光坊祐慶が陸奥国の安達が原で行き暮れてしまい、一軒家に宿を求めます。家にはひとりの老婆がいて、たき火のための薪を取るために山へ出かけます。老婆は出かける前に、自分の留守中に閨の中を見てはならぬといって出て行くのですが、同行していた僧が中を覗いてしまいます。僧から知らされた山伏が中を覗いてみると、死骸がいくつも積み重なり、つらなり続いています。山伏は、これが安達原の黒塚の鬼のすみかだったと気づき逃げるのですが、老婆は鬼の姿となり山伏を食い殺そうと追ってきます。山伏はその鬼を祈り伏せて消滅させるという話です。この作品は広く世の中に流布し、この後の文芸にも大きな影響を与えてゆきます。

江戸時代の人々は教養として謡曲をそらんじている人が多くありました。其角の「西瓜くふ跡は安達が原なれや」も謡曲「安達原」を下敷きとして詠まれたものです。夏の暑い盛りに甘く冷えた真っ赤な西瓜を夢中で食べ散らかした跡が、まるで、安達が原の鬼女が人を食べて血肉の散乱したありさまのようだと詠んだのです。人々が夢中でスイカを食べたあとの惨状を謡曲「安達が原」の場面と重ねた趣向は、凡人には思いつかない秀逸な見立てです。おいしくて真っ赤な西瓜と人肉…奇警な見立てだからこその面白さがあります。

ちなみに、この発句が詠まれた後の宝暦十二（一七六二）年九月には、四段目の安達原の「一つ家」の場面に謡曲「安達が原」の鬼女伝説を取り入れて脚色した、近松半二・竹田和泉・北窓後一・竹本三郎兵衛の合作である浄瑠璃義太夫節『奥州安達原』が、竹本座で初演されます。江戸時代の人々は、安達原の鬼女伝説を視覚的にも聴覚的にもより身近なものとして受け入れてゆくのです（図9）。

『摂津名所図会』が出版された当時、謡曲「安達原」（「黒塚」）や浄瑠璃『奥州安達原』によって、江戸時代の人々は、安達が原には人を喰う鬼女がいるという伝承を身近なものとして知っていたことでしょう。其角の句を詠むと、人々が無我夢中でスイカを食べる様子がありありと浮かんできます。鳴尾のスイカは、鬼女が人を食い散らすように、すべてを忘れて夢中になって食べてしまうほど赤くて甘くてみずしくおいしい。籬島が其角の発句を掲載したのは、鳴尾のスイカの魅力を、まだ鳴尾を訪れたことのない人々、鳴尾のスイカを食べたことのない人にも、広く伝えたいというねらいがあったからでしょう。

（図9）月岡芳年『奥州安達が原ひとつ家の図』明治18年
東京国立博物館蔵
（http://webarchives.tnm.jp/）より

まとめ

古来、訪れたことのない人々にも、歌枕として、文献にあらわれ歌に詠まれたイメージで知られてきた西宮が、江戸時代になると、実際にガイドブックを手にたずねてゆける場所として親しまれました。古代から現代まで、長い歴史と文化をもつ西宮の土地が、和歌や発句という文芸作品によって讃えられながら、その時代の新たな文化もとりこみつつ、現代につながっているということが、見えてきたのではないかと思います。